

4月19日（日）主日礼拝レジュメ

「あらゆる苦難から救い出される方」 使徒の働き 7章9～16節

ステパノの説教はヨセフへと移る。創世記37章を見ると、最初彼の兄たちはヨセフを殺して穴に投げ入れようと思っていたが、結局ヨセフを銀二十枚、つまり奴隷を売る値段で売ってしまった。なぜヨセフの兄たちはそのようなことをしたのか。使徒の働き7章9節では、「族長たちはヨセフをねたんで、彼をエジプトに売りとばしました。」というのがその理由だった。なぜねたんだのか。一つは37章5～10節にあるヨセフが見た夢のことだった。兄たちの麦の束がヨセフの束を拝んだというのと、太陽と月と十一の星がヨセフを拝む夢のことだった。もう一つが37章3、4節に記されており、ヨセフが父親ヤコブの寵愛を受けていたということ。しかし、神はこのような兄たちのヨセフに対する妬みから出た最悪の行為の中にあってもヨセフに守りを与えられた。神の守りとは、「しかし、神は彼とともにいた」（9節）ということ。神がともにおられるとは、みこころのままに、また人の思いや考え、願いなどをはるかに越えるかたちで神が**その人のため**に働いてくださる、みわぎをなしてくださる、さらには**その人を通して**神が働いて、主の栄光を現してくださる、その人ともに神がいてくださったと分かるかたちで主がご自身の栄光を現してくださることを意味している。ですから、私たちと神はともにいてくださり、人知をはるかに超えたみわぎをなしてくださると信じたい。「神は彼とともにおられ、**あらゆる苦難から救い出し**」ということが私にも実現させてくださいと祈りたい。

13節を見ると、ヨセフは兄たちに自分のことを打ち明ける中で、互いの和解が成就した。ヨセフの姿は、私たちに必ず疎遠になっている人との和解の機会をも神が与えてくださることを教えている。

私たちは、ヨセフとステパノを重ね合わせて見ることができる。10節で

ヨセフは「ファラオの前で恵みと知恵を与えられたので」とありますが、ステパノも 6 章 3 節で「御霊と知恵に満ちた」5 節「信仰と聖霊に満ちた」8 節「ステパノは恵みと力に満ち」このように、どちらも神から恵みと知恵が与えられている。そして、ヨセフは兄たちからねたまれましたが、6 章 10 節で、ステパノも「彼が語るときの知恵と御霊に対抗することができなかったので、最高法院に引いて行って、偽りの証人たちを立てて、彼を訴えようとし」たというようなめにあいました。ヨセフとともにいて、ファラオの前で恵みと知恵を与えられた神は、神が恵みと力に満たされたステパノともいっしょにいてくださった。

十二人のヨセフの兄弟たちは、やがて十二部族となり、そこからイスラエル民族が形成されていくこととなるが、彼らは、モーセに逆らい、神がお立てになった預言者のことばを聞こうともせず、そして神が遣わされた御子イエスキリストをも捕えて、不当な裁判で有罪にし、十字架につけて殺した。罪の性質を神の民であるイスラエルは、ずっと受け継ぎ続けた。11 節に「すると、エジプトとカナンの全地に飢饉が起こり、大きな苦難が襲って来たので、私たちの父祖たちは食べ物を手に入れることができなくなりました。」とあるが、神はあらかじめヨセフをエジプトに遣わして、彼らが食べる物を確保できるようにしてくださったように、イスラエルの民を決して神は見捨てられることはなかった。それと同じように、たとえ私たちがどんなに罪に罪を重ねることがあったとしても主は決して私たちをお見捨てになることはない。その中で、私たちはヨセフのように神がともにいてくださる歩みをしなければならない、主がともにいてくださるような歩みをする中であらゆる苦難から救い出されるとか、ヨセフやステパノのように周りに自分の味方になってくれるような人がいなくても、主がともにいてくださると確信できるような歩みをしていくべき。さらにヨセフのように「エジプト王ファラオの前で恵みと知恵が与えられ」とありますように、主の恵みと知恵に満たされ、自分を通して主の栄光が現れるように祈っていきたい。